

Title	アタッチメントが上顎インプラントオーバーデンチャーのインプラントに及ぼす影響：ボール，ロケーター，マグネットアタッチメントにおける比較
Author(s)	高橋，利士；西村，優一；権田，知也 他
Citation	大阪大学歯学雑誌. 2019, 63(2), p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73672
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アタッチメントが上顎インプラントオーバーデンチャーの インプラントに及ぼす影響

—ボール, ロケーター, マグネットアタッチメントにおける比較—

高橋 利士*, 西村 優一*, 権田 知也*, 池邊 一典*

(平成 31 年 2 月 13 日受付)

本総説の一部内容は、平成 31 年 1 月 17 日に開催された大阪大学歯学会第 127 回例会において、平成 31 年度弓倉奨励賞の授賞講演（対象論文：Takahashi T, Gonda T, Tomita A, Maeda Y. Effect of attachment type on implant strain in maxillary implant overdentures: Comparison of ball, locator, and magnet attachments. Part2: palateless dentures. International Journal of Oral and Maxillofacial Implants. 2018; 33: 357-364）として発表した。

はじめに

インプラントオーバーデンチャー（以下、IOD とする）は上下無歯顎者に対して広く適用されているが、その予後は上下顎において大きく異なり、Goodacre ら¹⁾は下顎 IOD においてインプラントの喪失が 4%であったのに対し、上顎 IOD においては 19%であったと報告している。また、上下顎の IOD における問題を比較した review においても、上顎 IOD は下顎 IOD と比べてインプラントの生存率は低く、術後の補綴に関する問題が多いと報告されている²⁾。

その原因の一つとして、下顎 IOD については McGill³⁾ならびに York⁴⁾の 2 つの世界的なコンセンサスにおいて、「2 本のインプラントを用いた IOD を第一選択にすべきである」とされているのに対して、上顎 IOD については、臨床研究や基礎研究の報告からガイドライン⁵⁾により「インプラントは本数を 4 ~ 6 本以上とし、前後的に広く多角的に配置し、連結すること」が推奨されて

はいるが、何本のインプラントを使用すべきか等のインプラントや義歯に関する世界的なコンセンサスはいまだに得られていないことが考えられる。

そこで、我々はこれまで上顎 IOD についてのコンセンサスを構築するための力学的なエビデンスとするために、インプラント（本数、配置、アタッチメント連結の有無）および義歯（口蓋部義歯床の有無、補強構造の有無）の様々な条件を想定し、インプラントおよび義歯への影響を模型実験により検討をおこなってきた。本研究ではインプラントの本数を 2 本と 4 本、配置を前歯部、小白歯部、大白歯部、アタッチメントについてはボールアタッチメント、ロケーターアタッチメント、マグネットアタッチメントの 3 種類を使用し、口蓋部義歯床および補強構造は無し条件下にて、インプラントへの影響をインプラントに生じる曲げひずみを比較することにより検討したので報告する。

実験用モデルの製作

常温重合レジンにて製作した上顎無歯顎模型に、4 枚のひずみゲージを貼付したインプラント（直径 4mm、長さ 10mm）をひずみゲージがそれぞれ近遠心および頬口蓋側方向となるように、前歯部、小白歯部、大白歯部にそれぞれ 2 本ずつ、計 6 本埋入した（図 1 インプラントおよび実験用模型）。上記の実験用模型に擬似顎堤粘膜を付与したのち、実験用模型に適合する無口蓋形態の実験用義歯を常温重合レジンにて製作した（図 2 実験用義歯）。

* 大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座 有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野

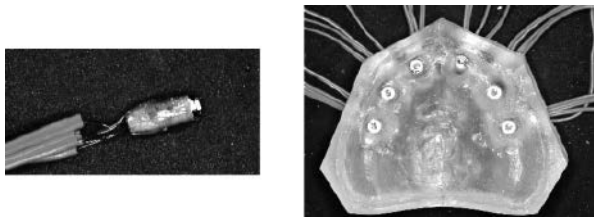


図1 インプラントおよび実験用模型
ひずみゲージを貼付したインプラント (左) と実験用模型 (右)

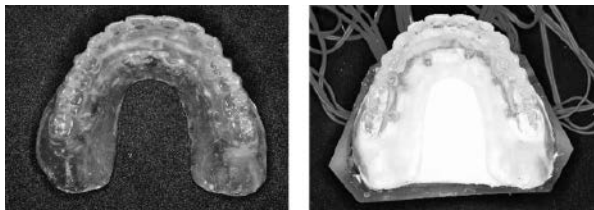


図2 実験用義歯
実験用義歯 (左) と実験モデル (右)

3種類のアタッチメントとそれぞれに対応したリテンションパーツ (ボールアタッチメント: 高さ 2mm と Gold cap, ロケーターアタッチメント: 高さ 3mm と

Blue disc, マグネットアタッチメント: 高さ 3mm と Flat type) を, 後述のインプラントの配置条件に応じてインプラントおよび実験用義歯の粘膜面に装着した。インプラントの配置は 2 本のみ (前歯部, 小白歯部, 大白歯部) と 4 本 (前歯部と小白歯部, 前歯部と大白歯部, 小白歯部と大白歯部) の計 6 通りで計測をおこなった。

これらの実験用模型および義歯を咬合器に装着した状態で 98N の垂直荷重を加え, 各インプラントの生じるひずみを計測し, それらのひずみの値から各インプラントにおける近遠心および頬口蓋方向の曲げひずみを算出した。その際に, 曲げひずみの正の値が頬側および遠心方向に, 負の値が舌側および近心方向にインプラントがひずむことを表すように算出した。

アタッチメントの違いによるインプラントへの影響

小白歯部の近遠心方向を除く全ての曲げひずみにおいて, インプラントの配置に関係なくボールアタッチメントを使用した場合が最も大きく, マグネットアタッチメントを使用した場合が最も小さく, ロケーターア

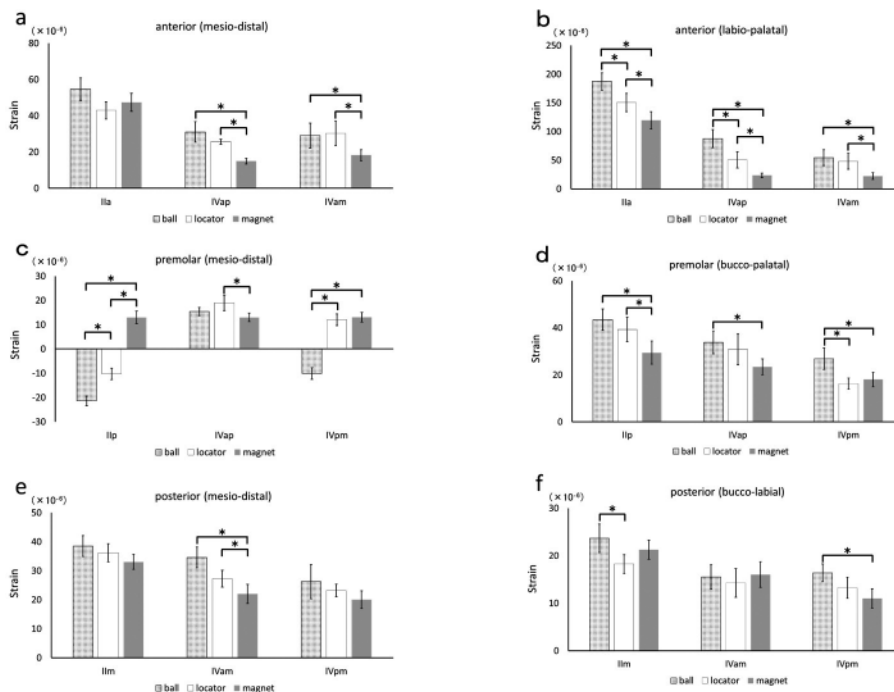


図3 アタッチメントとインプラントの曲げひずみ

(a) 前歯部 (近遠心), (b) 前歯部 (唇口蓋側), (c) 小白歯部 (近遠心), (d) 小白歯部 (頬口蓋側), (e) 大白歯部 (近遠心), (f) 大白歯部 (頬口蓋側). *: P<0.05

Ila: 前歯部のみ, Iip: 小白歯部のみ, IIm: 大白歯部のみ, IVap: 前歯部と小白歯部, IVam: 前歯部と大白歯部, IVpm: 小白歯部と大白歯部.

タッチメントを使用した場合は両者の間となる傾向を示した。さらに、ほぼ全ての条件下においてボールアタッチメントとマグネットアタッチメントとの間に有意差を認めた (図3 アタッチメントとインプラントの曲げひずみ)。

このアタッチメントによる結果の違いは、各アタッチメントの維持力発揮機構の違いから生じたものと思われる。つまり、ボールおよびロケーターアタッチメントはアパットメントのアンダーカット部にリテンションパーツが咬みこむことで維持力を発揮するため、義歯に力が加わるとリテンションパーツを介してインプラントにも力が加わると考えられる。その一方でマグネットアタッチメントの場合は、クーロン力により維持力を発揮するため、義歯に力が加わった時にリテンションパーツはインプラント上を滑走するため、インプラントには力が加わりにくいと考えられる。

以上のことから、マグネットアタッチメントを使用することでインプラントの配置に関係なく、インプラントに生じるひずみを軽減することができる可能性が示唆された。

本の場合と比べてアタッチメントの種類に関係なく、インプラントの曲げひずみは大きくなった。特に、唇口蓋側方向のひずみにおいて、2本の場合が4本の場合に比べて3~7倍大きくなり、ひずみの値自体も近遠心方向に比べて約4倍大きくなった (図4 インプラントの配置とインプラントの曲げひずみ (前歯部))。大白歯部のインプラントについては、前歯部の場合のような大きな差は認めないものの、2本の場合が一番大きく、4本の場合が小さくなるという傾向は同じであった。特に、小白歯部と大白歯部を使用した場合が、前歯部と大白歯部を使用した場合と比べて小さくなった (図5 インプラントの配置とインプラントの曲げひずみ (大白歯部))。

このことは、インプラントの部位に関係なく2本の場合のみはインプラントを結んだ線を軸として義歯の回転力が生じ、結果的にインプラントに力が加わるが、4本の場合にはインプラントを結んだ線で面が形成されるため義歯の回転力が抑えられ、インプラントに加わる力が小さくなると思われる。また、前歯部と大白歯部を組み合わせた場合の方が、小白歯部と大白歯部を組み合わせた場合よりもインプラントにより形成される面が大きくなり、義歯が安定することにより、インプラントのひずみは小さくなると考えられた。しかし、実際は前歯部のインプラントは埋入方向が咬合平面に対して傾斜しているため、小白歯部のインプラントよりも

インプラントの配置の違いによる インプラントへの影響

前歯部のインプラントにおいて、2本の場合のみは4

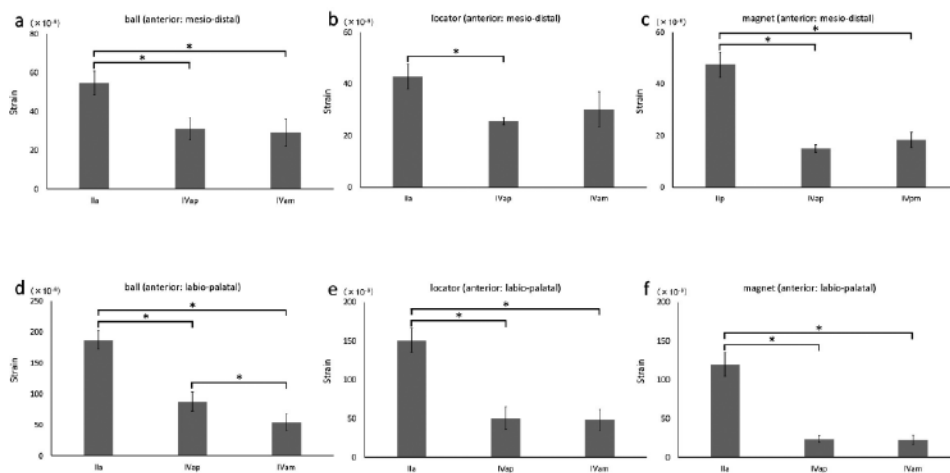


図4 インプラントの配置とインプラントの曲げひずみ (前歯部)

(a) ボールアタッチメント (近遠心), (b) ロケーターアタッチメント (近遠心), (c) マグネットアタッチメント (近遠心), (d) ボールアタッチメント (唇口蓋側), (e) ロケーターアタッチメント (頬口蓋側), (f) マグネットアタッチメント (頬口蓋側). *: P<0.05

IIa: 前歯部のみ, IIp: 小白歯部のみ, IIm: 大白歯部のみ, IVap: 前歯部と小白歯部, IVam: 前歯部と大白歯部, IVpm: 小白歯部と大白歯部.

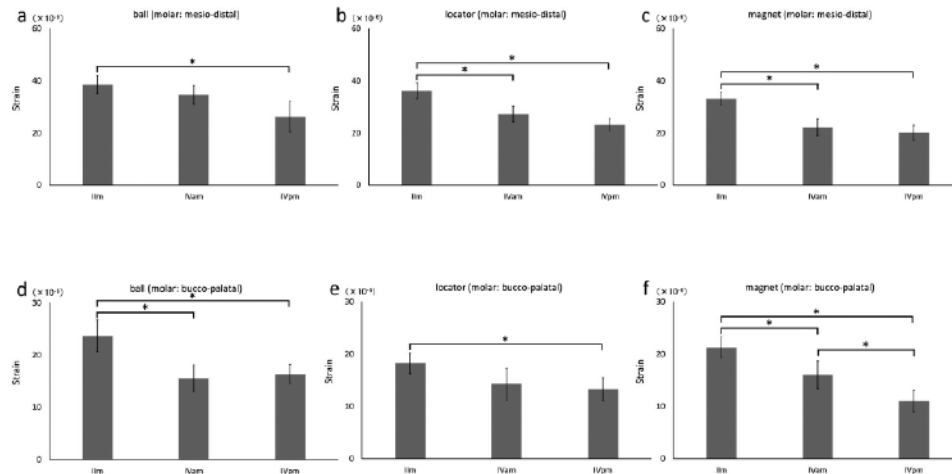


図5 インプラントの配置とインプラントの曲げひずみ (大白歯部)

(a) ボールアタッチメント (近遠心), (b) ロケーターアタッチメント (近遠心), (c) マグネットアタッチメント (近遠心), (d) ボールアタッチメント (唇口蓋側), (e) ロケーターアタッチメント (頬口蓋側), (f) マグネットアタッチメント (頬口蓋側). *: P<0.05

Ila: 前歯部のみ, IIp: 小白歯部のみ, IIm: 大白歯部のみ, IVap: 前歯部と小白歯部, IVam: 前歯部と大白歯部, IVpm: 小白歯部と大白歯部.

曲げひずみが大きくなったと考えられる。

以上の結果より、インプラントの配置に関しては小白歯部と大白歯部を組み合わせた4本の場合が、アタッチメントの種類に関係なくインプラントの曲げひずみを小さくなる可能性が示唆された。

口蓋部義歯床の有無によるインプラントへの影響

今回の口蓋部義歯床のない実験用義歯の場合の計測結果を、同一の実験モデルで計測した口蓋部義歯床のある実験用義歯の場合の計測結果⁶⁾と比較した。その結果、アタッチメントの違いによる影響については、ボールアタッチメントの場合のインプラントのひずみが最も大きくなり、マグネットアタッチメントの場合が最も小さくなるという傾向は同じであった。また、インプラントの配置の違いによる影響に関しては、口蓋部義歯床のある義歯の方が、2本の場合と4本の場合の差がより大きくなる傾向を示した。

インプラントの曲げひずみの値については、ほとんどのインプラントにおいて口蓋部義歯床のない義歯の場合が、ある義歯の場合に比べて大きくなることが明らかとなった。

これらのことから、口蓋部義歯床を除くことによって、義歯は変形しやすくなる⁷⁾と報告されてきたが、その結果として上顎IODの場合では下部のインプラント

も力を受けやすくなる可能性が示唆された。したがって口蓋部義歯床を設定しない場合は、補強構造等を使用する⁸⁾など義歯の変形を抑える対策が、インプラントの問題を防ぐために必要であると思われる。

おわりに

本研究の結果から、上顎インプラントオーバーデンチャーにおいて口蓋部義歯床のない義歯を使用し、インプラントを連結しない場合は、インプラントを小白歯部と大白歯部に計4本のインプラントを埋入し、マグネットアタッチメントを使用することで、インプラントの曲げひずみが小さくなり、術後のインプラントに関する問題の発生を防ぐ可能性が示唆された。

今後は、インプラントの連結による影響、および前述のインプラントや義歯の様々な条件の中でどの条件がどの程度インプラントや義歯に対して影響しているのか、について検討していきたいと考えている。

謝辞

本研究の遂行に関して、ご指導ならびにご助言をいただきました大阪大学歯学研究所前田芳信特任教授、ならびにご協力いただきました有床義歯補綴学・高齢者歯科学分野の皆様へ厚く御礼申し上げます。

なお、本研究はJSPS 科研費 (基盤研究 C 18K09699, 若手研究 B 15K20434) の助成を受けたものです。

文献

- 1) Goodacre C.J, Bernal G, Rungcharassaeng K, Kan J.Y. (2003): Clinical complications with implants and implant prostheses. *J Prosthet Dent*, **90**, 121-132.
- 2) Andreiotelli M, Att W, Strub J.R. (2010): Prosthodontic complications with implant overdentures: a systematic literature review. *Int J Prosthodont*, **23**, 195-203.
- 3) Feine J.S., Carlsson G.E., Awad M.A., Chehade A, Duncan W.J., Gizani S, Head T, Lund J.P., MacEntee M, Mericske-Stern R, Mojon P, Morais J, Naert I, Payne A.G., Penrod J, Stoker G.T. Jr, Tawse-Smith A, Taylor T.D., Thomason J.M., Thomson W.M., Wismeijer D. (2002): The McGill Consensus Statement on Overdentures. *Int J Prosthodont*, **15**, 413-414.
- 4) Thomason J.M., Feine J, Exley C, Moynihan P, Müller F, Naert I, Ellis J.S., Barclay C, Butterworth C, Scott B, Lynch C, Stewardson D, Smith P, Welfare R, Hyde P, McAndrew R, Fenlon M, Barclay S, Barker D. (2009): Mandibular two implant-supported overdentures as the first choice standard of care for edentulous patients - the York Consensus Statement. *Br Dent J*, **207**, 185-186.
- 5) 公益社団法人日本口腔インプラント学会編 (2016): 口腔インプラント治療指針 2016. 日本口腔インプラント学会, 東京, 26-30, 平成 27.
- 6) Takahashi T, Gonda T, Maeda Y. (2017): Effect of attachment type on implant strain in maxillary implant overdenture: Comparison of ball, locator and magnet attachments. Part 1: denture with palate. *Int J Oral Maxillofac Implants*, **32**, 1308-1314.
- 7) Mizuno Y, Takahashi T, Gonda T, Maeda Y. (2013): Mechanical analysis of a palateless denture. *Int J Prosthodont*, **26**, 419-422.
- 8) Takahashi T, Gonda T, Maeda Y. (2017): Can reinforcement of maxillary implant overdentures decrease stress on underlying implants? *Int J Oral Maxillofac Implants*, **32**, 63-69.